広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	キリシタン版ローマ字日本語文の分節標示と疑問符 ： 疑問文の文末位置以外にみられる疑問符を中心として
Author(s)	白井，純
Citation	国文学攷 , 243 : 1 - 20
Issue Date	2019-09-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049727
Right	Copyright (c) 2019 by Author
Relation	

キリシタン版ローマ字日本語文の分節標示と疑問符
— 疑問文の文末位置以外にみられる疑問符を中心として —

白　井　　純

1.　キリシタン版の紹介

キリシタン版は、16 世紀末から 17 世紀初頭の約 20 年間に、日本に渡来したイエズス会宣教師が西洋から輸入した活字印刷機を用いて長崎を中心として出版した文献である[1]。宣教の目的を達するため西洋の宗教書が日本語（文語）に翻訳されたが、そのためには日本語学習が必要であり、語学書である辞書、文法書、ならびに語学学習用テキスト（口語）も印刷された。しかし、キリスト教禁教と弾圧によって殆どが滅び、30 余点の残存するキリシタン版には孤本も少なくない。

以下に断簡を除いた文献一覧を挙げる（表 1）。

表 1　キリシタン版一覧（断簡を除く）

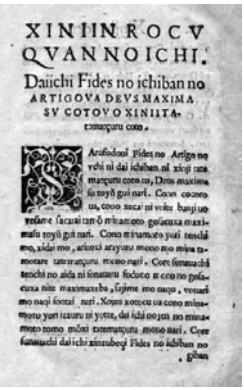
書名	内容	表記	刊行年	刊行地
Catechismus christianae fidei 日本のカテキズモ	教理書	ラテン語	1586	リスボン
Oratio habita a Fara D. Martino 原マルチノの演説	その他	ラテン語	1588	ゴア
Christiani pueri instilutio キリスト教子弟の薫陶	修徳書	ラテン語	1588	マカオ
De missione legatorum japonensium 遣欧使節対話録	その他	ラテン語	1590	マカオ
どちりいなきりしたん	教理書	国字	1591?	加津佐か
Sanctos no gosagueô no vchi nuqigaqi サントスの御作業の内抜書	修徳書	ローマ字	1591	加津佐
Doctrina christão ドチリナキリシタン	教理書	ローマ字	1592	天草
Fides no dŏxi ヒイデスの導師（図 1）	修徳書	ローマ字	1592	天草
ばうちずものさずけやう	典礼書	国字	1593	天草か
Feiqe no monogatari; Esopo no fabulas; Qincuxŭ 平家物語・ イソポ物語・金句集	文学書	ローマ字	1592-3	天草
De institutione grammatica libri tres 天草版ラテン文典	語学書	ラ・ポ・日ロ	1594	天草
Dictionarium latino lusitanicum ac japonicum 羅葡日対訳辞書	語学書	ラ・ポ・日ロ	1595	天草
Contemptus mundi コンテムツスムンヂ	修徳書	ローマ字	1596	天草か
Exercitia Spiritualia 霊操	修徳書	ラテン語	1596	天草
Compendium Spiritualis Doctrinae 精神生活綱要	修徳書	ラテン語	1596	天草か

Compendium Manualis Nauarri ナバルスの告解提要	修徳書	ラテン語	1597	天草か
Confessionarium さるばとるむんぢ	典礼書	国字	1598	長崎か
落葉集	語学書	国字	1598	長崎か
ぎやどぺかどる	修徳書	国字	1599	長崎か
Doctrina Christão ドチリナキリシタン	教理書	ローマ字	1600	長崎か
どちりなきりしたん	教理書	国字	1600	長崎
おらしよの翻訳	典礼書	国字	1600	長崎
朗詠雑筆	文学書	国字	1600	長崎か
Aphorismi Confessariorum 金言集	修徳書	ラテン語	1603	長崎か
Vocabulário da Lingoa de Iapam 日葡辞書（図 2）	語学書	ポ・日ロ	1603-4	長崎
Arte da Lingoa de Iapam 日本大文典	語学書	ローマ字	1604-8	長崎
Manuale ad Sacramenta Ministranda サカラメンタ提要	典礼書	ラ・日ロ	1605	長崎
サカラメンタ提要　日本語附録	典礼書	ラ・日ロ	1605	長崎
Spiritual Xuguiô スピリツアル修行	修徳書	ローマ字	1607	長崎
Floscuri 聖教精華	文学書	ラテン語	1610	長崎
こんてむつすむんぢ	修徳書	国字	1610	京都
ひですの経（図 3）	修徳書	国字	1611	長崎
太平記抜書	文学書	国字	?	?
Arte Breve da Lingoa Iapoa 日本小文典	語学書	ポ・日ロ	1620	マカオ

キリシタン版にみられる日本語の特徴は、キリシタン語学を創始した土井忠生によれば規範性、具体性、二元性、成長性であり、このことは、J. ロドリゲスの二冊の文法書が規範文法と記述文法の双方に配慮した絶妙な構成の上に成り立つことや、キリシタン版の日本語が写本から印刷本へ、また印刷本も 20 年という短期間ながら活字を入れ替えて版を重ねるごとに洗練されていったことによく現れている。また、異言語の接触は外から日本語を観察した日本語学習の視点をもたらし、それまで明らかで無かった日本語の特徴が鮮明に見えてくることも多い。

キリシタン版が日本語学上に注目されたのは、橋本進吉によるローマ字表記の表音性の主張が早い例だが、現在は、ポルトガル語の正書法の介入が無視できないことが明らかになっている。キリシタン版の辞書や文法書の源流がラテン語の辞書や文法書の学術的伝統にあることも軽視できず、文法用語一つとして単純な日本語訳で済む問題ではない。また、各種の言語規範とみえたものが草稿段階での内容の反映ではなく、活字印刷上の様々な制約や工夫、文選工・植字工による作業の結果であったという事例も多数報告されている。

キリシタン語学は、宣教という目的に基づく言語学（Missionary Linguistics）だが、キリスト教学は言うまでも無く、西洋の哲学、文学、それらの普及を促進した 15 世紀半ばの西洋式活字印刷術の発明という文化的背景も色濃く反映しており、そこには普遍性とともにそれぞれの地域や言語に応じた個別的特徴も現れている。ここで取り上げる疑問符の特殊な用法もその一つである。


XINIIN ROCV
QVANNOICHI.
Daiichi Fides no ichiban no
ARTIGOVA DEVS MAXIMA
SV COTOVO XINIITA-
tamaguru coto.

VOCABVLARIO
DA LINGOA DE IAPAM
com adeclaração em Portugues, feito por
ALGVNS PADRES, E IR-
MÃOS DA COMPANHIA
DE IESV.
COM LICENÇA DO ORDINARIO,
& Superiores em Nangasaqui no Collegio de Ia-
PAM DA COMPANHIA DE IESVS.
ANNO M.D.CIII.

図１　ヒイデスの導師　　図２　日葡辞書　　図３　ひですの経

本稿が調査の対象としたのはキリシタン版の日本語ローマ字表記である。辞書と文法書を除くと、「サントスの御作業の内抜書」「ドチリナキリシタン（1592)」「ヒイデスの導師」「平家物語・ イソポ物語・金句集」「コンテムツスムンヂ」「ドチリナキリシタン（1600)」「サカラメンタ提要日本語附録」「スピリツアル修行」が該当するが、口語体の「平家物語・イソポ物語 ・金句集」と問答体の「ドチリナキリシタン」も除外した文語体の宗教文献を中心に扱うことにした。以下に各文献を簡単に紹介する。

サントスの御作業

「黄金伝説」（西洋に流布した使徒や聖人の伝記）を中心に構成され、多彩な人物の対話が織りなす劇的な殉教譚に特徴がある。下巻の冒頭には創世記の翻訳部分も含む。

ヒイデスの導師

スペインのドミニコ会士ルイス・デ・グラナダの「使徒信条入門」第５部に相当する。国字本「ひですの経」は同書の第１部を中心とする翻訳である。ルイス・ デ・ グラナダはキリシタン版「ぎやどぺかどる」の原著 *Guia de pecadores* の著者でもある。

コンテムツスムンヂ

ドイツのトマス・ ア・ ケンピス著 *Contemptus Mundi* 別名 *Imitatio christi*「キリストにならいて」の翻訳で、国字本「こんてむつすむんぢ」の原著でもある。カトリック圏では聖書に次いでよく読まれる文献とされる。

サカラメンタ提要日本語附録

教会の典礼書で、カトリック教会の秘跡に関する典礼の手引き書。ラテン語で二色刷りの聖歌の楽譜を含むが、一部にローマ字日本語文がある。

スピリツアル修行

個人向けの黙想手引き書「ロザイロの観念」「御パッションの観念」「ソマナの観念」

他から構成される観想書で、読者の感情に訴える問いかけが多い。

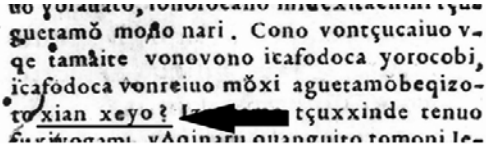
バレト写本

イエズス会士マヌエル・ バレト書写の私的な諸文書集。「サントスの御作業」とも一部重複する聖人伝、福音書の翻訳、マリアの奇跡物語などの内容から構成され、ローマ字日本語表記の特徴が印刷本と大きく異なる。

2. 問題の所在

キリシタン版ローマ字日本語文の疑問符は、ローマ字表記とはいえ日本語文に初めて使われた疑問符である。キリシタン版ローマ字日本語文の疑問符はコンマ、ピリオド、コロン、セミコロンと同じく分節記号で、感嘆符もそれに類する。キリシタン版ローマ字日本語文の句読法に関連した先行研究には、口語体の天草本「平家物語」について出雲（1985）、分かち書きについて千葉（2012）があり[2]、文語体の宗教文献の調査が必要である。

キリシタン版の疑問符は通常、疑問文の末尾にあって、句読点と同じく分節（区切り位置）を示しつつ疑問文であることを視覚的に明示するが、疑問詞の通則に反すると思われる奇妙な例がある[3]。


guetamŏ moſio nari. Cono vontçucaiuo v-
qe tamaire vonovono icafodoca yorocobi,
icafodoca vonreiuo mŏxi aguetamŏbeqizo-
to xian xeyo? [redacted] tçuxxinde tenuo

スピリツアル修行 66r-14
バリャドリッド本

- この御使ひを請け給ひて各々如何程か御礼を申し上げ給ふべきぞと思案せよ？（mŏxi aguetamŏbeqizo-/to xian xeyo ?）何れも謹んで天を臥し拝み（SP66r-14）
- サンペドロ言上し給ふは：御身は何処へ御幸なさるるぞと？（von miua izzucu ye miyuqi nasaruru zoto ?）御主答へ給ふは、再びクルスにかからんが為にローマへ赴くなりと宣ふなり（FD249-5）
- まして帝王とは如何でか言はんやと言ふ心なり？（icadeca iuanyato yŭ/cocoro nari ?）ジュデヨらはこの言葉を聞き、（SP39v4）
- マリア夫の道を知らざれば何とそのことあるべきやと？（nanito sonocoto arubequi yato ?）アンジョに宣へば、（BA86v11）

「スピリツアル修行」の翻刻を行った林田明（1975）が「？は誤りピリオドであるべきである」「ピリオドの誤か？」「？ハ誤」と注記するように、疑問文の末尾ではない位置に疑問符があるのは奇妙である。疑問文を「と」で引用した場合、疑問符は置かず「と」の後ろの文の末尾にピリオドやコンマを使うことが多い。

- 御心中の御喜び如何ばかりなるぞと言ふ事を思案せよ。(icabanari naruzoto/yŭ cotouo xian xeyo.)[4] さて又そのところに（SP20v-7）
- わが苦しみの如くなる苦しき事世にもありやと、(/yonimo ariyato,) 心を留めて観ぜよとなり。(SP90r-18)

疑問文の末尾では無い位置に疑問符を用いた類例は「ヒイデスの導師」「バレト写本」にもあり、疑問文の後ろに引用の「と」がある場合、疑問文の直後に疑問符を使うのは「サントスの御作業」のみである。他の句読点が正確に付されていることからみても、これらを誤植として見過ごすことはできない。むしろ、それぞれが択一的に疑問符の配置を行っているようにみえる（表2)。

表2　引用の「と」前後の疑問符

	サントスの御作業	ヒイデスの導師・スピリツアル修行・バレト写本
引用の「と」直前の疑問符	○	×
引用の「と」の後ろの疑問符	×	○

キリシタン版のローマ字本では、疑問符と句読点（ピリオドやコンマ、コロンやセミコロン）は連続しないが、文の末尾に必ずピリオドやコンマがある。キリシタン版の疑問符は「疑問文の後ろに置かれる句読点の一種」であり、「あした学校行く？」「これちょーヤバくない？」のような平叙文に疑問の意味を持たせる働きを持たない。

「こんてむつすむんぢ」を除くキリシタン版の国字本（漢字・仮名表記）に句読点が一切現れないことからも分かるように、ピリオド、コンマ、コロン、セミコロン、疑問符、感嘆符という多彩な句読点の使用と分かち書きは当時の日本語表記にみられず、西洋語の句読法を参考にしたことは間違いない[5]。

3.　西洋語の分節標示の歴史

3.1　句読点と分かち書き

駒田（2003）はフランス文学における句読法について論じる前提として、西洋の句読点の歴史について簡潔にまとめている（下線を補う)。

（前略）現代では句読点が文体の一部をなし、作者の創作意図を反映していることは一般に認められた事実といえよう。しかしこのように考えられるようになったのは実はごく最近の事なのである。ここで問題となるのは「句読点とは誰に属するのか」という点である。

句読点の歴史は古く、ギリシア・ラテンの時代にまで遡る。アリストテレスの『修辞学』

にみられるのが現在わかっている限りの最古の言及である。しかし、その役割は現代のものとはずいぶん異なる。『修辞学』でアリストテレスが対象としているのが読み上げるために書かれた文章であることも示唆しているように、口誦による伝達を前提として書かれた当時のテクストで重要だったのはまず第一に呼吸法を示すことであった。

中世まで続いたこの状況に大きな変化をもたらした二つの要因が「印刷技術の発明」と「黙読の一般化」である。（中略）しかしそれにもまして重要なのは、印刷工 typographe の登場である。中世では、原稿を読み、筆写し、更にそれを読み上げるための句読点を付すのは通常同一人物であった。そこへ直筆原稿から印刷される間に活字を組む印刷工が介入し、レイアウトの実権を握ることになる。（中略）また、十七、十八世紀にかけて印刷物がこうして流通してゆく中でテクストは徐々にその口誦されるという目的を失い、読書の形態は「黙読」へと緩やかに変化してゆく。それにともない、句読点のそれまで最も重要であった息継ぎに並んで、視覚による理解を助けるための文法的側面が重視されるようになる。『百科全書』中の句読点に関する記述中にも、句読点は息継ぎと並び、意味、統辞の三点をもとに付されると定義されており、その認識の変化が反映されている。（後略）

ここで駒田が句読点の基本的機能の変化と共に、活字印刷における文選工・植字工の役割を挙げているのは重要である。端的に言えば、西洋では綴り字（spelling）に代表される正書法（orthography）の確立は活字印刷における表記の統一がもたらしたからであり、キリシタン版も該当するからである[6]。

もう一つの理由として、鈴木広光（2015:267）は音読の息継ぎとは別に、異言語の読解におけるテクストの分節について言及している（下線を補う）。

ヨーロッパにおける分かち書きの始まりから定着への過程には、線条的、連続的なテクストを分節することの意味を考える上で有益な二つの視点が含まれている。ひとつは、分かち書きが、異言語接触の場における言語分析的読解や翻訳から始まったということである（中略）ラテン語のような書記言語に馴染みがなく、言語的親近性も薄いことばを母語とする人々にとっては、不確かな音声による再現に頼るよりも、当該テクストを分析的に読み解き、そのプロセスを視覚的に記号化したり、新たな書記フォーマットの写本を作成したりする方が受容のあり方としてははるかに有意義である。平安時代以降の漢文訓読の場において、テクストの読解者によって施されたヲコト点、読み仮名、返り点、句切り点もこれと同様のプロセスである。

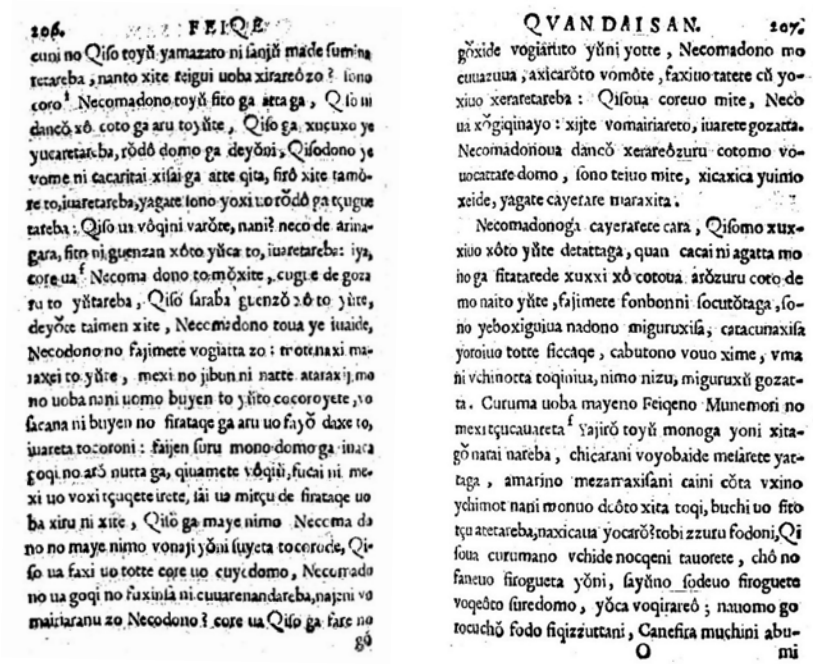
句読点は日本語史上、早くは漢文訓読において用いられ、それが日本語文の表記にも及んだとされる。中世の仮名文において区切り点を用いた例はそれほどみられず、句読点は江戸時代に増加するが、商業的出版によって同一本文が量産され、多くの読者を獲得した

こととも関係している。現代のような句読法が成立するのは明治時代中期以降で、一つは小説家による言文一致運動、もう一つは学校教育における正書法の確立が原因である[7]。

3.2　キリシタン版の分かち書き

キリシタン版の分節にかかわるよく知られた事例として、ローマ字日本語文の分かち書きを紹介する。名詞に格助詞が接続した文節の単位は日本語の膠着的特徴の典型で文法上も重要な単位だが、天草本「平家物語」には前後で分かち書きの有無が分かれる箇所があり、206 頁までは格助詞・係助詞の分かち書きあり、207 頁から分かち書きなしで、その部分には章立てや段落の切れ目は無い[8]（図 4 参照）。

格助詞・係助詞の分かち書きは、これより以前に出版された「サントスの御作業」（1591）、「ヒイデスの導師」「ドチリナキリシタン」「平家物語」（1592）の 206 頁以前ではすべて「有り」だが、「平家物語」の 207 頁以降と、その後ろに合冊された「イソポ物語」「金句集」（1593）は「無し」で、「コンテムツスムンヂ」（1596）、「ドチリナキリシタン」（1600）、「サカラメンタ提要日本語付録」（1605）、「スピリツアル修行」（1607）もすべて「無し」であるから、キリシタン版日本語ローマ字環境は、このページを境として格助詞・係助詞の分かち書きが切り替わる[9]。



206.　FEIQE

cuni no Qiſo toyŭ yamazato ni ſanjŭ made ſumina
tetareba, nanto xite teigui uoba xirareô zo? ſono
coro[1] Necomadono toyŭ fito ga atta ga, Qiſo ni
dancô xô coto ga aru toyŭte, Qiſo ga xuxuxo ye
yucaretareba, rôdô domo ga deyôni, Qiſodono ye
vome ni cacaritai xiſai ga atte qita, firô xite tamô
te to, iuaretareba, yagate ſono yoxi uo rôdô ga tçugue
tareba: Qiſo ua vôqini varôte, nani? neco de arina
gara, fito ni guenzan xôto yŭca to, iuaretareba: iya,
core ua[f] Necoma dono to môxite, cugie de goza
ru to yŭtareba, Qiſo ſaraba guenzô xô to yûte,
deyôte taimen xite, Necoma dono toua ye iuaide,
Necodono no fajimete vogiatta zo: mottenaxi ma
naxei to yŭte, mexi no jibun ni natte atarakij mo
no uoba nani uomo buyen to yûto cocoroyete, yo
ſacana ni buyen no firataqe ga aru uo fayô daxe to,
iuareta tocoroni: faijen ſuru mono domo ga inaca
goqi no arô nutta ga, qiuamete vôqiii, fucai ni me
xi uo voxi tçuqete irete, ſâi ua mitçu de firataqe uo
ba xiru ni xite, Qiſô ga maye nimo Necoma da
no no maye nimo vonaji yôni ſuyeta tocorode, Qi
ſo ua faxi uo totte core uo cuyedomo, Necomado
no ua goqi no ſuxinſâ ni cuuarenandareba, najeni vo
mairiaranu zo Necodono? core ua Qiſo ga fare no
gô

QVANDAISAN.　207.

gôxide vogiattuto yŭni yotte, Necomadono mo
cuuazuua, axicarôto vomôte, faxitto tatete cû yo
xiuo xeraretareba: Qiſoua coreuo mite, Neco
ua xôgiqinayo: xijte vomairiareto, iuarete gozatta.
Necomadonoua dancô xerareôzuru cotomo vo
uocattare domo, ſono teiuo mite, xicaxica yuimo
xeide, yagate cayerare maraxita.

Necomadonoga cayerarete cara, Qiſomo xux
xiuo xôto yŭte detattaga, quan cacai ni agatta mo
no ga fitatarede xuxxi xô cotoua arôzuru coto de
mo naito yŭte, fajimete ſonbonni ſocutôtaga, ſo
no yeboxiguiua nadono miguruxiſa, catacunaxiſa
yoroiuo totte ficcaqe, cabutono vouo xime, vma
ni vchinotta toqiniua, nimo nizu, miguruxŭ gozat
ta. Curuma uoba mayeno Feiqeno Munemori no
mexi tçucauareta[f] Yajirô toyŭ monoga yoni xita
gô natai nareba, chicarani voyobaide meiarete yat
taga, amarino mezamaxiſani caini côta vxino
ychimot nani monuo dcôto xita toqi, buchi uo fito
tçu atetareba, naxicatta yocarô? tobi zzuru fodoni, Qi
ſoua curumano vchide nocqeni tauorete, chô no
faneuo firogueta yôni, ſayŭno ſodeuo firogueta
voqeôto ſuredomo, yôca voqirareô; nauomo go
tocuchô fodo fiqizzuttani, Canefira muchini abu-
O　mi

図 4　天草本「平家物語」の 206 頁と 207 頁

土井（1971:56）は新旧の綴り字の切り替えが210頁前後であるとするが、正確にみるなら、この明確な表記上の変更は、天草本「平家物語」が八折（オクタボ）版であり、207頁からO紙が開始することと関係する。すなわち、八折版は一紙8頁の両面印刷、合計16頁を1枚の紙の表裏に印刷して裁断して製本するが、その用紙の境目で印刷上の方針として変更したことが強く示唆される。本文上はこの位置の同一文中で分かち書きの有無を切り替える必然性がなく、草稿の段階ではそもそも印刷用紙の境目位置の特定すら困難だからである。

土井（1971:57）は天草本「平家物語」の冒頭の総序と編者ハビアンによる序とで分かち書きのない新しい綴り字が用いられる理由を「ハビアンの自序一枚は扉紙一枚と本文最初の二枚とが続いて原紙一枚となる四折型であるから、その四枚は最初における同時の印刷に係ると観なければならない。さうすれば、ハビアンの自序は本文の後に書いて、新綴字法が使つてあつて、扉紙や本文とは違ふけれども、原稿でそれを改めることもなく、そのまま印刷したのであらう」とするが[10]、豊島（2019）によれば原稿の状態如何ではなく、そもそも印刷時期が異なるためである[11]。したがって、分かち書き「有り→無し」という印刷上の方針が反映したもので、個人的な表記規範の問題ではない。このような印刷工程の介入は、先に紹介した西洋語の状況をふまえ、キリシタン版を日本語資料として利用する際に十分に注意する必要がある。

4. キリシタン版日本語文の疑問符

4.1 疑問文の引用

疑問符は西洋語では疑問文の直後にあって分節を行いつつ、直前が疑問文であることを視覚的に明確にする。キリシタン版ドチリナの底本とされるM. Jorge著の*Doctrina Chrisã Ordenada a maneira de Dialogo, pera ensinar os minins*, Lisboa, 1602を上段に示し、日本語訳であるローマ字本「ドチリナキリシタン」（1600長崎刊）を中段、国字本「どちりなきりしたん」（1600長崎刊）を下段に示す。

M. Dizei vos minino, qual he o sinal do Christam?（師　子よ、お言い、キリシタンの印とは何か？）
D. Christãno xiruitoua nanigoto zoya?
弟　きりしたんのしるしとは何事ぞや

D. A sancta Cruz.（弟　聖なる十字架。）
X　Tattoqi von Cruz nari.
師　たつときくるすなり

M. Porque? （師　何故か？）
D. Sono yuye ican?
弟　そのゆへいかん

疑問符が平叙文に疑問の意味を持たせることがないことは特に文語体の宗教文献では徹底しており、必ず疑問詞もしくは疑問の終助詞「や」「か」を持つ[12]。疑問詞や疑問の終助詞を持つのは国字本でも同じで、ローマ字日本語文と国字文が対応するドチリナの相違点は疑問符の有無だけであり、それが文法体系に影響を与えることはない。

しかし西洋語と日本語では大きく異なる部分がある。日本語では、疑問文の後ろに引用の「と」が置かれた場合、疑問文の直後では文が終わらず、引用の「と」の後ろで文が終止するという点である。したがって疑問符の用法を確認するためには、疑問文の末尾だけでなく、引用の「と」との関係について３つの構文を想定する必要がある。

A. 疑問文＋と
B. 疑問文＋？＋と
C. 疑問文＋と＋？

以下に、疑問符の直前、および引用の「と」の直前に注目して、これらの構文の現れ方を整理する。

4.2　疑問符のある疑問文

キリシタン版の疑問符は、大半が疑問文[13]の直後に置かれる（表3）。

表３　疑問詞の直前

	や	か	疑問詞＋ぞ	と・と～	その他	計
サントスの御作業	128	8	64	0	34	234
ヒイデスの導師	269	0	52	3	19	343
コンテムツスムンヂ	106	8	86	0	24	224
サカラメンタ提要	31	0	0	0	0	31
スピリツアル修行	243	2	106	3	28	382
バレト写本	58	12	30	9	9	118

- 辺りの人々これを見て父母を諫めて曰く、何とていらぬ辛労をせらるるぞ？（nanitote iranu xinrŏ uo/ xeraruru zo?）御身の子をばデウスの味方となし給ひて（STp46-22）
- すなわち学者の長吏慢気の気色を以てビルゼンに対して申すは：恥も無きイドロスをそしる者は汝か？と。（Idolos uo so-/xiru mono ua nangi ca ? to.）サンタ打ち笑つて、如何にも柔らかに（STs69-2）

- その御苦しみは如何あらんと思ふや？（sono von curuxi-/mi icaga aran to vomô ya ?）御口より出る血は（STp231-21）

「その他」のなかには疑問の終助詞を持たない動詞や助動詞の露出した例が多いが、すべて疑問詞を持つため疑問文であることは明瞭である[14]。疑問符があるために疑問の助辞が省略されるということはない。

- 御父いかにと問ひ給はば、猛き獣に命を奪はれつと皆一度に訴へなば、何の子細あるべき？（nani no/ xisaino arubeqi ?）このたび無念を散ぜずは、（STs12-5）
- ジョセフ御声をあげ給ひ、汝等何の報いにてかかる罪科の身となれる？（nangira nanino mu/cuinite cacaru zaiqua no mito nareru ?）われこの国の権柄をば知らずや？否やと宣へば、（STs36-10）
- いかに御身聞こしめせ、今より我等をば誰にまかせ、子供は何となし給ふぞ？彼等が父をば誰と名乗るべき？（carera ga chichi uoba tare/to nanoru beqi ?）御身の位と、財宝をば誰にゆづれと思し召し給ふぞ？さても日頃（STs46-18）
- その中より一人進み出で給ひて、我に問ひ給ふは、見る人衆を誰とか思ふ？（miru ninju uo tare to ca vomô?）何処より来り給ふと思ふや？と。その時我答へて申さく、（STs182-9）

引用の「と」の後ろに疑問符が現れた用例には、初めに挙げた例の他に以下がある。

- これを見せ給ふアンジョにサンジョアン尋ね給ふは、これらは何たる人々ぞと？（corera ua nanitaru fitobito/zo to?）アンジョ答へて宣はく：これらは様々の難儀を凌ぎ給ひて、（FD287-15）
- 御主に申し上げ奉るは、かの童子の申す事を聞こし召し給はずやと？（cano dôji no mŏsu coto uo qico-/ximexi tamauazu yato ?）ゼスキリストのこの御返事には、（FD378-14）
- 如何ほどの喜びを以てか御顔ばせを拝み給ふべきぞと思案せよ？（icafodono yoocobiuo motteca voncauoba-/xeuo vogamitamŏbeqizoto xian xeyo?）実に御母を見参らせん時は（SP75r-7）

4.3　引用の「と」の直前

引用の「と」の直前に疑問符が現れた例は「サントスの御作業」に 23 例あるほか類例がない。

- この証拠をば各々デウスの如く崇めらるるアポロの記録に表れずや？と宣ひ（Deus no go/toqu agameraruru Apolo no qirocu ni arauarezu-ya ? to notamai ,）、実にゼスキリスト御親と（STs71-22）

• 如何なる悪しき獣に喰はれけるやと悲しむ風情に訴へなば、誰かは知らせ申すべき？と（tareca ua xiraxemŏsubeqi?/to）評議定まり立ち帰る。（STs14-13）

引用の「と」の直前に句読点が置かれた例も非常に珍しい。引用の「と」の直前では分節が非常に弱く連接性が強いためだろう。

• このサントはオラシヨのたびごとに、Deus meus & omnia と、宣ふなり。これ。如何にデウス、我が万事は御身なり、といふ心なり。（Icani Deus , vaga banji ua von mi nari, to/yŭ cocoro nari.）（STp184-22）

而じてシメヨン、アベカラ、アナニヤス、と言ふ三人の老人を（Ananias , toyŭ sannin no rŏjin/uo）殺し奉らんとするに臨んで、（STs311-10）

• 御哀れみを顕し給ひ、御息災を我に与へ給へ我が君、と宣ふものなり。（go socusai/uo care ni ataye tamaye vaga qimi , to notamŏ/mono nari.）（FD567-9）

4.4　分かち書きとの関係

原則として格助詞の分かち書きがある「サントスの御作業」「ヒイデスの導師」だが、疑問の終助詞「や」および引用の「と」の前後の分かち書きは様々で一定ではない[15]。引用の「と」と共起した場合は終助詞「や」の直前で分かち書きすることが多い。

• 何と様に知れ給ふぞと言ふに（xire tamŏ zoto yŭni）（STp129-2）
• 誰か我らが中より仏神に対して、か程の苦しみを堪ゆべきやと言へり。（cafodo no/curuximi uo corayu beqiya to iyeri.）（STp171-5）
• 如何なる道を以て強く重なるべきやと言ふ事を（casa-naru beqi yato yŭ coto uo）思案すべきものなり。（FD86-10）
• 如何程慣用なりやと言ふ儀を（icafodo canyô nari ya to yŭ/gui uo）（FD107-21）

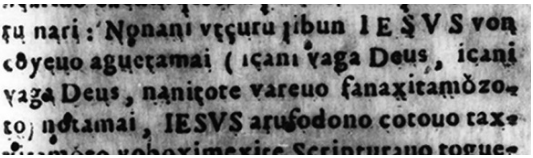
「スピリツアル修行」では引用の「と」の直前で分かち書きをした例は 1 例しかない。

• 如何に御主我が足を洗ひ給ふべきやと、申されければ：（icani von aruji vaga axiuo arai/tamŏbeqiya to , mŏsareqereba：）（SP163r-11）

さらに「スピリツアル修行」では引用の「と」の直前で改行した場合はハイフンで繋ぐほどに強い連接性が認められる。

- 学問を一つにして右の御作のものに不足あるべきかと尋ぬると言ふとも、（gacumon uo fitotçu ni xite/migui no gosacu no mono ni fusocu aru beqi ca-/to tazzunuru toyŭ tomo ,）（FD27-11）
- 如何程の御悲しみをか抱き給ふべきぞと思案せよ？（icafodono/võcanaximiuoca idaqitamŏbeqizo-/to xian xeyo ?）（SP22v13）
- 如何程か御礼を申し上げ給ふべきぞと思案せよ？（mŏxi aguetamŏbeqizo-/to xian xeyo ?）何れも謹んで天を臥し拝み（SP66r-14 再掲）
- 御アニマ、御色体に何事を受け給ふぞと言へる事を観ぜば、（Von-/Anima, goxiqitaini nanigotouo vqetamŏzo-/to iyeru cotouo quanjeba,）（SP92v-5）
- その時ピラトス、ジュデヨ等より申し掛くる事共を聞き給はぬやと、（Iudeora yori/mŏxicaquru cotodomouo qiqitamauanuya-/to , mŏsareqeredomo ,）申されけれども（SP169v-5）

また、「スピリツアル修行」は 4 カ所（172-173 頁）のみ引用部分を丸括弧で囲うが、引用の「と」も含めて囲っている。



スピリツアル修行 173r7

- イエズス御声をあげ給ひ（如何に我がデウス、如何に我がデウス、何とて我を放し給ふぞと）宣ひ、（SP173r7）
- サンタマリアに、（如何に女人御身の子を見られよと）宣ひ、御弟子に（汝の母はこれなりと）宣へば、それより御弟子サンタマリアを御母と崇め給ふなり。（SP172v27）
- 高き御声にて（如何にパアデレ我がスピリツを御手に渡し奉ると）宣ひ、御髪を傾け、御アニマを渡し給ふなり。（SP173r14）

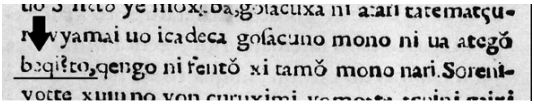
したがって、引用の「と」の直前に疑問符を置かないのは、疑問符が句読点の一種として扱われており、連接性が強い引用の「と」の直前に句読点を置けないのが理由だと考えてよい。疑問符によって疑問文であることを明確にするよりも、分節記号としての働きを優先したということである。

ここで、分かち書きの状況と、引用の「と」直前への疑問符の挿入について整理しておく（表 4）。疑問符の挿入は「サントスの御作業」に「～や？と」8 例、「～ぞ？と」5 例、「～か？と」3 例、「～べき？と」6 例の計 23 例があり、所在はすべて下巻で、19 例までが 1 頁から 96 頁（八折版の A 紙から F 紙まで）にあることは、組版上の方針の違いであることをうかがわせる。

表４　分かち書きと疑問符挿入の関係

	分かち書き	「と」前の分かち書き	疑問符の挿入
サントスの御作業（1591）	あり	あり／なし	あり （下巻のみ）
ヒイデスの導師（1592）			なし
コンテムツスムンヂ（1596）	なし	なし	
サカラメンタ提要（1605）			
スピリツアル修行（1607）		なし（ハイフン）	
バレト写本	なし	なし	なし

「サントスの御作業」で引用の「と」の直前に疑問符が置かれる 23 例のうち 6 例は、引用の「と」の直後にも句読点が置かれる。



サントスの御作業 2 巻 313-8
ボドレイ本

- 如何でか御作のものにはあてがふべき？と、堅固に返答し給ふものなり。（icadeca gosacuno mono ni ua ategŏ/beqi?to,qengoni fentŏ xi tamŏ mono nari.）（STs313-8）
- 何処ともなく出で行くぞや、ただしプチハル御許しか？その身一人の狼藉か？と、（sono mi fitori no rŏje-/qi ca? to, ）かの装束を取出し、（STs17-9）
- ビルゼンに対して申すは：恥も無くイドロスを謗る者は汝か？と。（Idolos uo so-/xiru mono ua nangi ca ? to.）¶ サンタうち笑ひて、（STs69-3）

疑問符が疑問文の標示、句読点が文の終わりを示すため、疑問符と句読点が重ねて置かれることになったのだろうが、句読法として違和感があるのは否めない。

5.　分節記号としての疑問符

5.1　直後の文字

キリシタン版ローマ字本の分節記号には、ピリオド、コンマ、コロン、セミコロンがあり、疑問符と感嘆符もその働きをもつ。文の末尾にはピリオド、それより細かい分節にコンマを用いており[16]、文末に置かれる疑問符は、分節記号としてはピリオド、もしくはコンマの代替である。

ピリオドの直後の文字は大文字、コンマの直後の文字は小文字であり、異例は極めて少ない。疑問符の直後の文字に注目することで、疑問符のもつ分節の働きをみることができるだろう[17]（表 5）。

表５　疑問符の後ろの文字の大きさ

	疑問符の後ろ		
	段落	大文字	小文字
サントスの御作業	8	29	173
ヒイデスの導師	27	144	134
コンテムツスムンヂ	3	128	83
サカラメンタ提要	4	27	0
スピリツアル修行	31	268	55

文脈や構文にも依存するので目安程度に考える必要はあるが、「サントスの御作業」では疑問符の直後に小文字が続くことが多いのに対して、「スピリツアル修行」は大文字が多い。「ヒイデスの導師」はその中間である。疑問符の後の文字の大小という点からみて、分節記号としての疑問符は「サントスの御作業」においてはコンマ、「スピリツアル修行」においてはピリオドに近い働きを持つ[18]。

結果として、「サントスの御作業」では引用の「と」の直前に疑問符を置くことが可能で、「スピリツアル修行」では不可となる。そのため「スピリツアル修行」では、疑問符が文末にあれば問題は無いが、文中の疑問文であって分節性が弱い場合には不適当であるという判断につながるだろう。その意味で、疑問文の連続する箇所を中心として疑問文の末尾にコンマを使った例があることは注目に値する。

- しかるにおいては、何事を第一望み給ふべきや、（Xicaru ni voiteua/nanigoto uo daiichi nozomi tamŏ beqi ya ,）すなわち御身のグロリアのために尚々証拠となる儀なるべし。（FD231-10）
- これみな所作を以て科の起り所と、その因縁を断ち切る事なれば、汝も何れの科を止めざるぞ、（nãgimo/izzureno togauo yamezaruzo ,）また別して除くべき科は何れぞと言ふ事をよく観ぜよ。（SP197v-20）
- 我がアニマに宿し奉りたる御方は誰にて在ますぞ、我ら又何者ぞ、（Vaga Animani yadoxitatematçuru/võcataua tarenite maximasuzo ,）我に来り給ふ御心宛は何たる事ぞと、右のメディタサンに見ゆる如くに観念をなし、（SP380v-3）
- この儀は何の様に下知せらるるぞ、（cono guiua nanno/yõni guegi xeraruruzo,）或いは何とてかくは言ひ付けらるるぞと心に糺問する事あるべからず：（SP391v-12）
- 汝は何たる事に我が身を節せざるぞ、又何たる因縁によつてモルティフィカサンをせざるや、（nanitaru inyenni yotte Mor/tificaçamuo xezaruya ,）又モルティフィカサンをすべき了簡は何事にてあるべきやと心を砕き（SP404v-13）

「サントスの御作業」では、疑問の終助詞「や」の直後は疑問符もしくは引用の「と」であり、他に「や否や」「や、否や」がある他、疑問符を置かない例は上に上げた1例しかない。そのため、疑問符が繰り返し使われることもある。

- いまだジャコブは御齢を保たせ給ふや？給はずや？と人の聞くをも顧みず、（Imada Iacob ua von youai uo tamotaxe ta/mǒ ya ? tamauazu ya? to fito no qiqu uomo cayerimizu,）（STs38-3）
- 我に問ひ給ふは：見る人衆を誰とか思ふ？何処より来たり給ふと思ふや？と。（miru ninju uo tare to ca vomô? izzucu yori/qitari tamǒ to vomô ya ? to.）（STs182-10）

「ヒイデスの導師」で疑問符を置けるにもかかわらず置かなかったのは5例だが、「スピリツアル修行」では15例あり、文中に疑問符が連続することが少なくなっている。

5.2　ローマ字本の役割からみた疑問符

キリシタン版日本語文にはローマ字と国字があり、疑問符を含む句読点はローマ字環境にしか現れない。ローマ字表記は外国人宣教師の使用を念頭に置いているが、四つ仮名やオ段長音の開合のような当時の日本人でも区別が困難だった音声的特徴を表記上に反映させている。カ行の表記や拗長音の表記のような統一されない表記はポルトガル語表記の影響による異表記であり、外国人にとっては発音の差異をもたらすものではない。したがって、表記は必ずしも統一されないが表音性は強く担保され、それにより当時の日本語を理想的に発音できるものとなっている[19]。

句読点の標示は正確な音読に貢献しており、引用の「と」の直前には句読点が現れないが、そこで区切って読む習慣が無かったからだろう。疑問文の直後は意味を理解するうえで疑問符を置くのが適当な位置であるが、引用の「と」直前は音読の際の区切りとしては不適切な位置になり、理想的な音読を考慮したローマ字本の表記としては適切でない。

千葉（2012）は土井（1963:71）に「平家物語で主に日常会話における一般の話し言葉に重点が置かれたと観れば、伊曾保物語では説教等に利用するに足りる内容と調和したところの効果的な表現が考慮されてゐる」とあることを引用しつつ、天草本「イソポ物語」は「宣教師としての職務である説教の場」にふさわしい会話の習得を意図したために格助詞に加えて疑問の終助詞の分かち書きもやめたとするが、天草本「平家物語」の格助詞の分かち書きの切り替えが草稿段階に計画的になされたものではなく印刷中に実行されたに過ぎないこと、分かち書きは音読の際に区切ることが可能な位置を示すが句読点のようにその位置で区切ることを指定するものではないことをふまえるなら、疑問の終助詞の分かち書きの変化は説教という具体的目的を強く意識したものではなく、鈴木博（1988:120）「日本語に対する観察が進み、日本語の膠着語としての性質に気づくようになって、これらの

格助詞を体言と続けて記す方が、日本語として（読む場合、話す場合に）実際的であり、スマートであるとして続けるようになったのであろう」のような理解が穏当だろう。西洋が既に黙読の時代であったとしても、キリシタン版に音読という独自の役割があることは言うまでも無い。

文節という単位が音声と文法の双方に有効な単位[20]であるように、分かち書きや句読点の標示は通常、音声上の区切りであると共に文法上の区切りでもある。キリシタン版の国字本は日本人の読者を想定して句読点を用いない伝統的な表記法に拠ったが、外国人が読むローマ字日本語文には準拠すべき日本側の表記法が無いため、文法に配慮した表記を選択することも可能だった。

句読点や分かち書きには音読と文法という二つの目的が共存しているが、疑問符ではどうだろうか。単なる音読の区切り位置標示であれば疑問符や感嘆符はそもそも必要がなく、それを用いたのは西洋の句読点の歴史と同じく文法的理解を視覚的に補助するためである。しかしキリシタン版ローマ字日本語文では音読にあたって問題が生じる。音読上の区切り位置は多くの場合、文法上の区切り位置に一致するが、疑問文を「と」で引用する場合、音読の区切り位置と文法上の区切り位置が一致しないという問題が生じたのである。

本稿で取り上げた疑問符の特殊な用法が音読と文法の双方への配慮の結果だとすれば、これらの用法が生じた理由も必然的で、誤植とみるのは妥当でない。

6. まとめ

本稿の要点を整理する。

- キリシタン版ローマ字日本語文に現れる疑問符は原則として疑問文の直後にあり、疑問文であることを視覚的に標示する句読点の一種である。
- キリシタン版ローマ字日本語文の句読点は音読の区切り位置および文法的な構造を視覚的に標示する記号である。
- 疑問詞は疑問文を引用する「と」の直前には現れにくいが、その理由は、音読の際に引用の「と」は直前の語と区切らず発音されたため、句読点の一種として疑問符を用いるのは不適当だからである。
- 音読の区切りとして不適当な位置には疑問符を含む句読点を置かないが、一部では引用の「と」の後ろの句読点の位置でコンマやピリオドに代えて疑問符を用いた例があり、これは疑問文の文法的な明示と音読の区切りの双方に配慮した折衷的な用法である。

A. 疑問文＋と

疑問文の標示を犠牲にして音読の区切りを優先（通常の用法）

B. 疑問文＋？＋と

音読の区切り位置を犠牲にして疑問文の標示を優先（「サントスの御作業」の一部）

C. 疑問文＋と＋？

疑問文の標示と音読の区切りの両方に対応（「ヒイデスの導師・ スピリツアル修行・ バレト写本」の一部）

- このような特殊な用法がみられる理由は、西洋語の環境で発達した疑問符の用法を文法の異なる日本語環境に適用しようとして、音読の区切り位置と文法的な構造の単位とがずれた結果である。

注記

本稿は、第 3 回キリシタン語学研究会「キリシタン文献における分節記号としての「？」」(2015/10/4 京都府立大学)、第 6 回信州大学人文学部言語学カフェ「キリシタン文献における分節記号としての疑問符」(2016/3/17 信州大学)、広島大学国語国文学会研究集会「キリシタン版ローマ字日本語文の疑問符―疑問文の文末位置以外にみられる用例を中心として」(2019/7/13) の発表に基づくものである。

論文化までに多くの時間を費やしたが、多くの方々に有益なご意見をいただいたことに感謝する。

本研究は JSPS 科研費 JP17H02341 および JP18K00608 の助成を受けたものである。

参考資料

亀井孝・ H. チースリク・小島幸枝（1983）『日本イエズス会版　キリシタン要理』岩波書店

高祖敏明編著（2010）『キリシタン版『サカラメンタ提要　付録』』雄松堂

鈴木博（1985）『ヒイデスの導師』清文堂

林田明（1975）『スピリツアル修行の研究　翻字影印篇』風間書房

福島邦道（1979）『サントスの御作業　翻字研究篇』勉誠社

松岡洸司・三橋健（1979）『コンテムツス・ ムンヂ』勉誠社

H. チースリク・福島邦道・三橋健（1976）『サントスの御作業』勉誠社

参考文献

出雲朝子（1985）「天草版平家物語における句読点の用法」『青山学院女子短期大学紀要』39

宇野義方（1982）「句読法の歴史」『講座日本語学 6　現代表記との史的対照』明治書院

金子彰（1986）「中世仮名資料の句読点について―高山寺経蔵の片仮名交り点について―」『鎌倉時代語研究』9

衣畑智秀（2014）「日本語疑問文の歴史変化―上代から中世―」青木博史 ・小柳智一 ・高山善行編『日本語文法史研究 2』ひつじ書房

小林芳規（1977）「表記法の変遷」『現代作文講座 6　文字と表記』明治書院

小松英雄（1998）『日本語書記史原論』笠間書院

駒田登紀子（2003）「十九世紀フランスにおける句読点をめぐる状況とフロベール『感情教育』の括弧と複声のエクリチュール」『仏文研究』34

坂井晶子（2018）「明治・大正期の初等教育における句読法―作文教育を中心に―」『日本語の研究』14-2

白井純（2015）「原田版「こんてむつすむん地」の版式について」『訓点語と訓点資料』135
杉本つとむ（1967）「句読法（パンクチュエーション）の史的考察―江戸時代の文学作品を中心に―」『武蔵野女子大学紀要』2
鈴木博（1988）『室町時代語の研究』清文堂
鈴木広光（2015）『日本語活字印刷史』名古屋大学出版会
竹村明日香・金水敏（2014）「中世日本語資料の疑問文―疑問詞疑問文と文末助詞との相関―」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究　研究報告書（1）』3-20、国立国語研究所
千葉軒士（2009）「キリシタン文献・ ローマ字本の分かち書きについて　体言と助詞の関係から」『名古屋言語研究』3
千葉軒士（2012）「キリシタン文献・ ローマ字本の分かち書きについて：文末に観察される助辞を伴う表現」『Nagoya Linguistics』6
土井忠生（1971）『吉利支丹語学の研究　新版』三省堂
豊島正之編（2013）『キリシタンと出版』八木書店
豊島正之（2019）「キリシタン版の表紙絵裏の本文の印刷に就て」『上智大学国文学論集』52
橋本進吉（1934）『国語法要説』明治書院
飛田良文（1974）「句読表示の成立過程―明治初年から『句読法案』まで―」『言語生活』277
福島邦道（1979）『サントスの御作業　翻字・研究篇』勉誠社
屋名池誠（2014）「中世末期日本語の〈語〉と〈語〉表記：『天草版平家物語』前半の分かち書きから」『藝文研究』106
柳田征司（1985）『室町時代の国語　国語学叢書5』東京堂出版
湯浅栄男（2013）「二葉亭四迷のツルゲーネフ作『あひびき』の翻訳について：　オノマトペなどをめぐる二つの訳文に関する若干の考察」『近代』109

【注】

1　他にドミニコ会による日本語に関連した文献として、「ロザリオ記録」1622 マニラ刊、「ロザリオの経」1623 マニラ刊、「日西辞書」1630 マニラ刊、ディエゴ・コリャードによる「懺悔録」「日本文典」「羅西日辞書」1632 ローマ刊があり、キリシタン版に含めることがある。ローマ字日本語表記はイエズス会のそれを踏襲する部分と、独自の部分がある。

2　松本朋子氏（京都府立大学）が天草本「平家物語」を中心とした疑問文に関する研究発表を京都府立大学国語学研究会で連続して行っており、疑問符にも言及がある。

3　用例は、「サントスの御作業」（1591 年刊）を ST、「ヒイデスの導師」（1592 年刊）を FD、「スピリツアル修行」（1607 年刊）を SP、「バレト写本」（1590 年代初め成立）を BA で示す。丁付けは表（recto）、裏（verso）とし、該当箇所のローマ字原文の改行“/”、スペース“ ”、ハイフン“-”も含めて忠実に示したが、便宜上、ローマ字表記を翻字している。

4　本文には narazoto と誤植。

5　福島（1979:406）では、16 世紀の日本の文献に句読点が厳密には付けられていないことを根拠に「恐らく、「サントスの御作業」のローマ字本は、かれら宣教師たちの句読の方針でつけられたのではないかと考えられる」とする。「こんてむつすむんぢ」が句点をもつのは、他のキリシタン版国字本とは異なる性質を持つ本だからである。詳しくは白井（2015）を参照。

6　豊島（2013:134）によれば、17 世紀後半のイングランドの印刷教科書には誤謬（スペリング、句読法）修正の責任が組版者にあると明言した例があるという。

7　句読点の歴史についての研究は多い。杉本（1967）、飛田（1974）、小林（1977）、宇野（1982）、出雲（1985）、金子（1986）、湯浅（2013）、坂井（2018）などを参照。

8　最近の研究に、千葉（2009）、千葉（2012）、屋名池（2014）などがある。

9　豊島（1989）、同（2013:131）、同（2019）によれば、古田啓の指摘が最初だという。また、豊島は分かち書きをやめた理由を一音節の自立語（例えば「野」と助詞「の」）が区別し難いことの緩和にあるとする。千葉（2012）によれば疑問の終助詞の分かち書きの切り替え時期は格助詞・係助詞と異なるという。

10　下線を補った。豊島（2019）が言うように、小松（1998）は、天草本「平家物語」が初級学習者向け、同「イソポ物語」が上級学習者向けであり、それが分かち書きの有無に反映するとしたが、他の宗教文献の実態からみて無理がある。鈴木博（1988:120）は「土井先生は前述の分かち書きの変更を、イエズス会の日本語研究における不断の成長性のあらわれの一つと認められた」と追認するが、分かち書きの切り替えだけでなく、バレト写本の無秩序な表記も印刷本と大きく異なるので、「イエズス会の日本語研究」には活字印刷の作業行程によって完成する部分があったとみるべきだろう。

11　豊島（2019）は印刷版面の詳細な観察に基づき、当初は内容が確定しないため印刷せず空白で、序を後から追加して印刷したために分かち書きの有無が現れたもので、異なる表記規範が同一紙に並存するわけではないと指摘している。

12　このことはキリシタン版宗教文献では徹底するが、天草本「平家物語」には例外もあるようである。詳しくは前掲の松本氏の論考を待ちたい。また、本発表の内容は疑問文の分析ではないので簡単に紹介するにとどめるが、柳田（1985）によれば、真偽疑問文について「竹取物語」（中古語・文語）では文末に「や」と「か」の両方がみられるが、天草本「イソポ物語」（中世語・口語）では「か」だけであり、疑問詞をもつ疑問文では中古語では文末「ぞ」もしくは係り結びの「か」、中世語では文末「ぞ」もしくは「か」だという。衣畑（2014）は、中世に係り結びの衰退によって疑問詞をもつ疑問文に「か」が使われなくなり（「ぞ」が多くなる）、真偽疑問文では文末の「や」が衰えて文末の「か」が多くなる、としている。また、竹村・金水（2014）はキリシタン文献の天草本「平家物語」と「サントスの御作業」を比較し、どちらも疑問詞をもつ疑問文では文末「ぞ」が多く、天草本「平家物語」では疑問詞と文末「か」の組み合わせ、「サントスの御作業」では疑問詞と文末「や」の組み合わせがみられるという。本発表で取り上げるキリシタン版の傾向もこれに反するものではなく、キリシタン版のローマ字本に疑問詞があることがこうした文法体系に影響を及ぼしたとは考えにくい。

13　疑問の終助詞「や」「か」が用いられる疑問文（疑問詞の有無がある）、もしくは、疑問詞＋終助詞「ぞ」の組み合わせとなる疑問文である。

14　数少ない例外として「人々答へて申さく：八十歳、百歳が限りにて、何たる人も逃るる事無しと、報しければ、いと賢き御知恵にて、人知れず御心苦しく、御吐息をつき給ひて、<u>あらむつかしのこの世界や？</u>かほどまで見苦しく、悲しき事の多くありて、」（STp251-13）は疑問文ではない。類例が「サントスの御作業」に 2 例、「スピリツアル修行」に 2 例、「バレト写本」に 6 例あるが、感嘆符の誤植・誤写だろう。

15　千葉（2012）によれば、「サントスの御作業」「ヒイデスの導師」に単独で用いられた引用の「と」の前は分かち書きありが多く、「コンテムツスムンヂ」「スピリツアル修行」では分かち書き無しだという。

16　キリシタン版のコロンとセミコロンの使い方は詳細不明で、統一的な方針は無いかもしれない。

17　大文字で書かれる原語や、一部の日本語の名詞（都： Miaco, 南蛮： Nanban など）は除いた。

18　出雲（1985:32）は、天草本「平家物語」の会話文では疑問符の後ろが大文字だが、天草本「イソポ物語」では小文字であり、後者では疑問符がコロン（セミコロン）かコンマに準じたものとして使われている、としている。

19　理想的な発音を念頭に置かないなら、バレト写本がオ段長音の開合を全く区別していないように、音素の対立が衰退した部分の書き分けは本来必要がない。

20　橋本進吉（1934）『国語法要説』は「文節は，文を分解して最初に得られる単位であって，直接には文を構成する成分（組成要素）である」と定義し，その特徴として「それだけはいつも続けて発音される」「アクセントが定まっている」「前後に音の切れ目がある」「頭音あるいは尾音に（ガ行子音の環境異音や開音節構造などの）規則をもつ」など音声上の形式的特徴から説明する。

―しらい・じゅん、広島大学大学院文学研究科准教授―